鏡

星桜なつき。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡

【Ｎコード】

Ｎ０４３３Ｆ

【作者名】

星桜なつき。

【あらすじ】

いつもの日常。変わらない毎日。二人はいつも楽しくて。このまま、ずっと続いていくと思っていた。でも、ある日。二人に起こった出来事が。彼を、彼女を変えていく。甘く、切ない恋物語。最後にわかる全ての理由。

プロローグ（前書き）

少し変わった恋愛小説です。最後に鳥肌立つような結末になると思いますので、最後までどうぞお付き合いくださいませ。評価、感想など、是非よろしくお願いします。

プロローグ

何も、怖がることなどないのに。
何も、不安なんてないのに。
心に湧き起こるこの不安な気持ちはなんなのだろう。
時々眩暈のように、思い出したように襲ってくる感覚。

俺が、本当は『ここにはいない』

俺という存在が曖昧で。
本当は、この世界までも何もないような気がしてきて。
俺の存在が、全て嘘で。
景色も見えない。音も聞こえない。香りも、感覚も、何もない世界に、ひとり。

怖くて。
淋しくて。
哀しくて……。

そんな感覚を憶えたとき。

この腕の中にいる、優しくて、暖かい感覚に、甘えたくなって、たまらない。

「ああっ……はぁっ……」

野原に咲く花を集めた花束のような甘くて優しい香りを含んだ粉雪のような、白くて、儚くて、柔らかく暖かい、彼女の身体。
優しく、甘えてくる、心に響く声。

彼女の中へと俺の全てがとけてゆく――。

愛している。

そんな簡単な言葉では言い表すことができないほど。
俺の、大切な女の子を、優しく抱きしめる。
彼女は優しく、力強く、俺に抱き返してくる。

「はぁ、はぁ、はぁ……。大好き……」

愛しい女の子が俺を包みこんでくれる。
優しい声で、優しい言葉をかけてくれる。
心が落ち着いてゆく。

そうさ……。
ここにいる女の子が、現実でないなんて、そんなことあるはずないんだ。
俺は、ここにいるんだ。

「俺も、愛している……。心から」

そのまま、彼女の唇を俺の唇でふさいでいた。

――――

「もう……。そんな不安な顔。そんな顔をしないの」

彼女が俺を優しい瞳で見下ろしている。
いたずらをした子供をしかっているような、優しい口調で。

「俺、そんな顔をしていたか？」

「そうね……。まるで、迷子になった子供みたい。不安になって、今にも泣き出しそうな」

「また、子供扱いか？」

俺は左手を伸ばして彼女の頬に触れ、首へと撫でる。

「あはは。でも、あなたは、ここにいるよ。ほら、今私、あなたを私の中で感じてる。あなたを包み込んでいるのがわかるよ。だから、不安になることなんて、なにもないんだよ」

彼女の頬にある俺の左手をとって。そっと俺の指輪をつまんで。指を絡めてくれた。

「それはわかってる。俺は君を愛しているし、こうしていると、俺の心まで、君と一つになれていて。俺は幸せだよ」

「うん……。私も、幸せ」

彼女の長い髪が、俺の胸に擦れて。そのまま、顔をうずめた。

「ただ、俺……。昔から、よく……変な感覚に襲われることがあるんだ」

「変な感覚？」

「ああ。なんだか、俺……。本当はここにいないんじゃないかって」

「ここにいない？」

「わからないけど、とても不安になって、怖くなる。遠い、知らない、何も無いところに、独りでいるような……」

「大丈夫だよ。安心して。あなたはここにいる。それは、私が一番よくわかるよ」

彼女は起き上がり、俺を優しい瞳で見て。繋がっていた手をぎゅっと握り締めてくれた。

「ありがとう。俺も、一緒にいるってほんとよく感じる。愛している女の子がここにいるって」

起き上がり、彼女を引き寄せて、抱きしめる。

彼女の柔らかな胸に顔をうずめる。とくん、とくんと、鼓動が聞こえていた。

彼女は俺の頭を優しくなでてくれていた。

……愛しい。焦がれるほどに。

「……ねえ。あなたの昔のことを、話して」

「俺の、昔のこと？」

「うん。あなたのこと、もっともっと知りたいから。それに……。あなたの昔の話があれば、そんな不安って、きっとなくなると思う」

「不安が、無くなる、か。そうだな。少し、話してみる」

「うん。訊かせて。あの人のことも。もっと訊きたい」

「ああ。それじゃ、どこから話せばいいかな……」

佐山沙希

『ココロに～　残った～　少しだけの気持ちを～　私だけに～　伝えて～』

ちょっと前にテレビとかで聞こえていた旋律。その曲に合わせて澄み渡る綺麗な声が部屋に流れていた。

この歌の主は、大きな画面の前にあるステージに立って、手を前に出したりポーズをつけたり、半ば踊るように振り付けをしながら楽しそうな声を出している。

これで連続４曲目。

この賑やかで明るい女の子は、

『佐山沙希（さやまさき）』

この真夏の中、避暑地を求め、佐山に誘われて俺は嫌々ながらもこのカラオケボックスに来ていた。

佐山は歌がかなり上手い。歌いたがるのも良くわかる。

歌の歌い手に似せて歌っているのだが、声は綺麗だしよく響く。強弱のつけ方。メリハリとビブラートの響き。何処かのアーティストがカバーを歌っているようだ。

正直なところ、俺はほとんど歌えなくても、佐山の歌を聞いているだけで心地良い。

しかし、そんなふうに佐山を褒めたりしたら、佐山はきっとつけあがるだろうから、口が裂けても言うわけにはいかないが。

佐山が歌うたび、ふりをつけているのでさらさらの黒いショートの髪が舞っている。白いノースリーブのブラウスに、短めな赤のチェックのプリーツスカートという服装。

この服装も良くない。

ステージに立って踊っているので、佐山のスタイルの良い体が否応なしに目に付いてくる。肌の露出が多くて、細くて長い手足が強

調されているので、少しだけ、俺も男だと思ってしまう。
くそ、なんで、佐山にドキドキしないといけないんだ。
夏だから仕方が無いといえば仕方が無いが。
だから俺は、いつものように、聞いていない、見ていないふりをして歌本に視線を落としていた。

「こらー！　私の歌を聴けー！」

間奏の間に俺の姿を見てマイク越しに言う。
微妙にエコーがかかった大きな声が癪に障る。

「うるせー！　マイクで大声を出すな！　歌わないなら俺が歌うぞ！」

「音痴なんだから、おとなしく私の歌を聴いて上手くなるようにしなさい！」

「うるせー！　うるせー！　ほら、次が始まるぞ」

「むー」

再び、佐山の綺麗な歌声が部屋に流れていく。
佐山と俺はいつもこんな調子だ。
俺と佐山とは腐れ縁……。こう説明するのが一番しっくりいくか。

佐山とは結構前からの付き合いだ。
高校に進学したときに、前の中学で一緒であったやつは佐山だけだった。それもたまたま同じクラスになっていて。昔の学校の話が合ったことから始まりだったような……気がする。
いつの間にか俺の話相手には佐山がいて。今みたいにからかった

りふざけあったり……。
そうそう、こうして二人だけでカラオケボックスに来たりしているが、くれぐれも、佐山は俺の彼女とかじゃない。
いつも俺につっかかってきて憎たらしいくらいだ。
でも、なにかとこいつとは話が合うし、どこかほうっておけないところもあるし、一緒に遊びに行ったりすることは嫌じゃなかった。
手を焼かせる妹って感じか。
まぁ、そんな関係だ。

『いつか～　きっと～　それが勇気にな～って～　風に舞う～　翼に変わる～』

佐山の歌も、終わりを告げていた。

夏

みーんみーんみんみー……。

日差しが強い。また今日も晴れ。
涼しいカラオケボックスの中から出ると、もわっとした空気が俺達を包み込む。アスファルトが遠くの方でぼやけて濡れているように見える。俺は額に滲む汗を拭いた。

じーじーじー……。

プラタナスの並木道に響き渡る小うるさいセミども。ああ、もう、よくもこんなじりじりする世界で賑やかにしていられるもんだ。うっとうしさが余計感じるじゃないか。

もう少しカラオケボックスに居たかったのだが、これ以上いると懐に響く。
あー、それにしても暑い……。夏は嫌いだ。涼しい世界が恋しい。

「……だからね、その鏡の中の世界では、見た目は同じ人でも、性格とか違うの」

気がつくと、佐山が俺の左にいて楽しそうに何か話しかけている。
話していたことを思い出すと、佐山が読んだ本の内容についてのことらしい。

「まぁ、この世に自分と似た顔をしている人間は3人はいるって言うしな」

話半分に聞いていたので適当に話を合わせた。

「ねぇ、違う自分っていうのに逢ってみたいと思わない？」

「そうだなぁ……。自分がもう一人いたら楽だろうな。宿題とか分けてやったりして」

「もー。そうじゃなくってー」

横にいたかと思えば前にでて。ぴーちくぱーちくけたたましく言い寄ってくる。この暑いのになんて元気なんだ。

セミかお前は。

「ああ、もう、その本を俺にも見せたいって気持ちはよくわかった。今度読んでみるからさ」

「ほんとかなぁ……」

いぶかしそうな瞳で俺を見上げている。

話半分に聞いてたことを気がつかれたのだろうか。

俺はちょっとばつが悪くて、視線をセミの聞こえるほうに移した。

「そうだ。それじゃ、これから図書館に行こうよ」

「図書館？」

「鏡もこの本を読めば納得するよ」

佐山の持っていたかばんから本を取り出し、俺に見せるように振り振りさせる。

「今持っているのか。俺に読ませるには、それを少しの間貸してくれるだけでいいと思うが」

図書館って、俺に縁があるわけがない。静かで、本のにおいがしていて。なんとなく暗いイメージがあるし。行ったことないが、なんとなく場違いな気がする。あまり行きたくない。

「だめだよ」

「何がだめなんだ？」

「私が返してから、借りないとだめなんだから」

なんて律儀なんだ。それはそうなんだけどさ。

「それに、図書館ってね……」

「図書館って、なんだ？」

「涼しいんだよ。入るだけでもただだし」

涼しいのか。

「ほら、行きたくなった」

「そりゃ、こんなところにいるよりましだ」

「うん。よしよし。それじゃ行こ。ここからすぐだよ」

ここからすぐ？
ということは、佐山のやつ最初から俺を図書館に連れて行くのが目的だったんじゃ。

「お前、もしかして、それが目当てでカラオケに誘ったのか」

「あはは。そんなことないよー」

嘘だ。目が嘘を言っている。
間違いない。最初からそのつもりだったな。

「まあいいか。図書館、どっちだ」

涼しいなら、そこに行きたい。

「うん。ついてきて」

それにしても図書館とは。佐山、俺の知らないところで図書館に行っていたのか。

実際のところ佐山はかなり頭がいい。
佐山は学校の成績でも常にトップクラスにいる。
何か勘が鋭いというか、どきっとさせられることがよくある。根回しも良いし、物覚えも早い。カラオケボックスの後のこれからのこととかもそうだ。ただ、ちょっとだけ抜けているところがあるが。
そういえばこの前のテストでは、佐山はすごい点を取っていたな。

先日のテストが戻って来た時だ。

――――

「佐山、物理は何点だった？　今回は負けないからな」
「……」
今にも泣きそうな顔をして答案を見つめている。
「どうしたんだ？」
「回答欄、書くところ一つづつ間違えてた……」
答案用紙を見てみると右上には大きな丸の文字が一つ。
「あはははは。お前すごいな。狙って取れるようなものじゃないぞ」
「うー……合っていればいい点取れてたのにぃ……」
「詰めが甘いな。よし、今度から佐山のあだ名はノビ太君な」
「なぐってやるー」
涙目で、手を振り上げて。
「あはははは。すまんなー」
―――
このテストは実際のところ、ずれたところを直してもらったようだが、ひどく先生に怒られていたな。
注意していれば大丈夫なのに、こういうところがあるから佐山は

佐山らしくていいのだが。

そういえば佐山は見てくれも良いそうで、成績もいいことで、クラスの中では男女問わずかなりの人気があるようだ。

クラスで一番かわいいと言われているそうだが。

いや、学校一かわいいと聞いたこともある。

確かに、背はそんなに高くはないが、スタイルはいい。手足や腰が細くて、出ているところはしっかり出ている。モデルやアイドルと言ってもいいほどだ。

顔も、目が大きくて笑顔も良く見せてくれる。表情も良く変わって飽きさせない。

でも、俺にしてみれば、普通なんだが……。

佐山をかわいいとか、綺麗だとか意識したことはない。どこにでもいる女の子という感じだ。

そういえば、そんなにかわいいといわれているのに、彼氏とかいなさそうだよな。休みの日といえば俺とこうして出かけているくらいだしな。

まぁ、性格があんなんだから無理なんだろうな。

図書館に向かう佐山の後姿を見て、そんなことを思っていた。

図書館

図書館は、佐山の言うとおり中は涼しかった。

本屋とは違い、本棚が高い。俺の身長以上の高さまで本がずらっと並んでいる。

俺達のほかにも数人いるようだが、誰も何も話をしていなくて静かで。誰かがページをめくる音や本を探す音がかすかに感じ取れる。インクか、紙の匂いだろうか。独特の香りもする。

本の中にも『ライバルに勝つ！　カラオケ編』とか『相手を出し抜く１００の方法』とか、読んでみたいような本がいくつかある。

さっきはなんとなく場違いな気がして嫌だったが、好奇心のほうが先にたった。

「鏡。なにうろうろしてるの。こっちだよ」

所在なげに本棚の間を行ったりきたりしていたら、小声で佐山にとがめられた。辺りにいる人の視線が痛い。

涼しいって言っても、違う意味で涼しくなれた気がした。

でも図書館って結構興味をそそられるものがあるんだな。俺もまた来てみたくなった。

佐山に促され、司書さんがいるカウンターに名前とかを記入とかしたりして手続きをすませた。

「はい。これで鏡が借りたことになりました」

「なんか遠回りした気がするぞ」

「物事には、ルールってものがあるんだから、ちゃんとしないとだめなんだから」

「はいはい」

同じようにしていた佐山から本を受け取る。

その佐山が面白いって言って聞かないのが、この、『鏡』という本らしい。ハードカバーの白い表紙にでっかく黒い文字で『鏡』とある。

俺の名前、

『秋月鏡（あきつききょう）』と一緒だから、興味を引かれたのだろう。

あるいは、俺をからかっているだけなのかもしれない。

『かがみ』と読むそうだが。

ありきたりな題名だな。

「俺が読まずにそのまま返すってことがあっても、文句言うなよ？」

「いいもん。読まないって言っても読ますもん」

「日本語になってないぞ」

「いいもん」

ふくれた顔をして俺を覗き込む。からかっているわけじゃなさそうだ。

「わかった、わかった……。ちゃんと読んでおく」

「うんうん。あとで感想とか聞くからね。ちゃんと読んでおくんだぞ」

にこにこして、ほんと嬉しそうだ。俺にそんなにまでして読んで欲しいって……。この本にちょっと興味が出てきた。

「それにしても、佐山、お前、本を読むんだな」

ぱらぱらめくったら字ばかりで、挿絵もほとんど無い小説だった。厚さもかなりある。佐山がこんな本を読んでいたなんて知らなかった。

「なに？　なにか悪い？」

本を見て、佐山を見たら何かいぶかしんだようだ。俺の想像が表情に出ていたのだろう。

佐山は成績が良いから、本当はこんな本を読んでいたのかもしれないが……。

「いや、あまり想像できなくてな。佐山が本を読んでるところ」

「……それってー。ばかにした？」

にこにこしているが、目が笑っていない。

「なんかほら、佐山のイメージからするとマンガとか読んで大笑いしているところが見えてな……」

「鏡。殴られたい？」

「あはは。すまんなー」

怒ったり、笑ったり。表情がころころ変わって面白い。佐山をからかうのは楽しい。

まあ、暇なときにでも読んでみるか。

外はだいぶ夕方になってきて、涼しい風が流れていた。

涼しかった図書館から出ても、暑さはそんなに感じなくなっていた。

――――

「鏡。花火大会があるんだね」

図書館の窓の外側に張られた1枚のポスター。それが佐山の目に写ったのだろう。近所にある神社で……。日付は、今日だった。これからあるのか。

「そうみたいだな。行ってみるか？　これを見るとお祭りみたいだな。露店とか出てそうだな」

お祭りみたいなことはあまり好きではないが、今はなんとなく佐山と行きたい気持ちがあった。

「ほんと？　鏡と一緒に行ってもいいの？」

目をキラキラさせて嬉しそうな顔で俺を見上げる。

「まぁ、俺もたまにはこういう地元の伝統風靡な行事に参加したいしな」

たまには俺も頭の良いところを言ってやらないと、佐山にバカにされる。

「なにいってんの？　全然似合わないし」

頭おかしくなっちゃった？　というような目で俺を見る。

こいつ……。

「……じゃあいかね」

「あー、うそうそ。ごめんね。傷ついた？」

案外、さっきの俺の仕返しなんだろう。やっちゃったって顔をしている。

「うるせー。もういかねぇよ」

「ごめんね。せっかく誘ってくれたのに」

半分涙目で俺を見つめる。

本当に行きたくないわけじゃないのに。

しょうがないな。

「佐山は行きたくないのか？」

「……えっ？　そんなことないよ。行きたいよ」

俯いて、声が小さくて。

「そうか。でもまだ時間があるな。出直して来るとするか。俺はこの本を置いて、並木道で６時まで待つからな。それでいいな」

「えっ……。うんっ」

ほんと、嬉しそうな笑顔を俺に向けた。日も落ちればもっと涼しくなるだろう。

高校生活最後の夏に、色々しておきたいしな。

嬉しそうに家路に向かう佐山の姿を見て、誘ってよかったと思う自分がいた。

お祭り

日が傾き、空が赤い色の線を見るようになった。
あたりもふんわりとした赤い色に染まって、騒がしかった声もひぐらしの優しい音色に変わっていた。
時々、浴衣を着た女性や、子連れの夫婦とすれ違う。俺と同じくらいの年齢のカップルもいた。
さっき佐山と別れた並木道。この先の高台に、花火大会があるという神社がある。
俺はプラタナスによりかかり、来るであろう佐山を待った。

人通りが多くなってきた辺りを見ていると、一人の女の子が俺に近づいてきた。
淡い水色に赤い花の模様が入った浴衣。紺の帯。黄色い巾着袋が目に入った。
一瞬、誰だかわからなかった。

「おまたせ、鏡」

「佐山……？」

夕焼けに霞む佐山の笑顔は、今まで見たことが無くて。浴衣に着飾った佐山は俺の知っている佐山ではなくて。
すごく、女の子を感じて。
俺は、鼓動が早くなるのを自覚した。

「驚いた？」

「……ああ、最初誰だかわからなかった」

なんとなく、恥ずかしい気がして、佐山の顔を見ていられなかった。

「鏡、次のセリフ禁止」

「なんだ？」

「馬子にも衣装」

「……お前、自分でそう思っていたのか。かわいそうなやつだ」

「あーっ！　しまったー！」

「策士策におぼれるってやつだな」

「うー。余計なことというんじゃなかった……」

ふくれて、俯く。よかった。いつも知っている佐山だ。

「……でも、浴衣、似合ってるぞ」

恥ずかしくて、声が小さくなった。でも、なんとなく、言いたくなった。

「えっ？」

「よし、それじゃ、行くか」

「鏡、今なんていったの？」

俺の声が届かなかったようだ。佐山を褒めるなんて、柄にも無い。聞こえなくて良かった。

「行かないのか？」

「あ、待って」

恥ずかしいという気持ちが、俺の脚を早めさせた。

「鏡、待ってー」

後ろを振り向く。着慣れていないんだろう。佐山の歩幅が短くて、佐山が少し遠くにいた。

「しょうがないな。ゆっくり歩いてやるよ」

俺は立ち止まり、佐山を待って。

「もー、歩くの早い」

からころからころ音を立てて。黄色い巾着袋を振り回して。やがて、俺に追いついた。

「ゆっくり行ってよー」

俺の着ているシャツにしがみつく。佐山の髪から、良い香りが流れてきた。

「あはは。そんなにゆっくりだと着く前に終わっちゃうぞ」

「鏡、あとで仕返ししてやる」

「あはは」

こんな、佐山と一緒にいられるのって、何か不思議な気持ちだった。

――――

神社はすでに人でごった返していた。

境内にはいろんな露店が立ち並び、その間を走り回る子供。綿菓子を持った女の子。いろんな人たちの喧騒が楽しそうに賑やかに辺りを包んでいた。

花火大会とはいうが、なにかのお祭り、なのだろう。

そういえば、昔、こうしたお祭りに親とかに連れて行ってたもらっていた思い出がある。

それが、このお祭りだったのかもしれない。

人が多くてうざったくて、良い思い出が無かったが。

「すごい人」

「そうだな、迷子にならないようにな」

「むー。それは鏡じゃないの？」

俺の左で膨れて見上げる。

「うるさいなー。こういう人ごみには慣れていないんだよ」

「あはは。離れちゃだめだよ」

まあ、佐山が歩きなれていないようだから、ゆっくり歩いていれば、はぐれることはないだろう。俺は歩幅を合わせて佐山の隣を歩く。

「まずは、わたがし買わないと」

「綿菓子？」

「このおまつりにはわたがしを持っていないとだめなんだから」

「なぜだ？」

理由がわからん。

「あはは。ほら、あそこ。いこ」

俺の問いを笑ってごまかしたようだ。

と、急に俺の左手を掴んで引っ張っていく。

「お、おい、佐山」

「早く、早くー」

佐山はすごくはしゃいで。子供のように。

引っ張られた手が暖かい。

そういえば、佐山の、手、繋ぐの初めてだな。

小さくてやわらかくて。これが、女の子の手なんだな。

なんとなく、佐山の繋いでいる手を放さないようにぎゅっと握っていた。

やがて、綿菓子を売っている露店の前に来た。

「鏡、ちょっとまっててね。何処かに行ったらだめだよ」

「うるさいなー。どこにもいかねぇって」

「あはは。うん」

佐山は露店へ綿菓子を買いに行った。

握っていた左手をじっとみる。緊張していたのか、少し汗がにじんでいた。

「秋月じゃないか。お前も来ていたのか」

ふと、俺の右横から声がした。

「吾妻じゃないか」

人ごみの中に、白いストライプが入った黒い甚平を着たクラスメイトの吾妻がいた。

「と、いうことは、佐山さんもいるわけだな」

「どういうわけだよ」

「ちょい見せろよ」

「なんでだよ」

「このお祭りで女の子と来ると言ったら浴衣だろ。あの佐山さんの浴衣姿。見ないと男としてもったいなさすぎる」

「はぁ？」

まるで佐山が浴衣であることを当然のように言う。

まぁ、こいつはクラスでも有名な女たらしだが。

「知らないのか？　このお祭りはな、ある言い伝えがあってだな」

「言い伝え？」

「ああ。このお祭りではな、女の子が浴衣を着て綿菓子を持って……」

「浴衣？　綿菓子？」

「鏡。はぐれたらだめだよ」

後ろから佐山の声がした。振り向くと綿菓子を食べながら歩いている佐山がいた。

「おおっ。佐山さん！　やっぱり浴衣姿！」

「うわ」

すんごい嫌そうな顔をする佐山。俺の後ろに隠れようとする。

「うおおおお。なんと、なんと可憐！　綺麗！　そしてかわいい！　てめぇ秋月！　後でおぼえていろよ」

持っていた閉じた扇子を俺に向ける。

「だから、なんでだよ」

「我が校一のかわいい女の子の心を射止めているんだからな。まぁ。おまえだから仕方が無いという声もあるが。うらやましいことは確かだ」

手を組んで、うんうんと頷く仕草を見せる吾妻。

「言っていることがわからんぞ。日本語で話せ」

「まあいい。わからないのはお前だけだ。佐山さん、大事にナ。マジかわいかったぞ」

「おい」

「じゃあな」

そう言いたいことだけ言って人ごみに消えていった。

なにがしたかったんだ、あいつは。

浴衣とかの話、聞いてないぞ。

……まあいいか。

「……私、あの人苦手」

後ろから佐山がつぶやいた。

「そうなのか？　別に害はないと思うが」
わけがわからないけどな。
「うん。そうなんだけどー。苦手」
「まあ、吾妻はあんな性格だしな」
両手で綿菓子を持って俯いている佐山。
吾妻が佐山のこと、可憐とか綺麗とかかわいいとか言っていたが、なんとなく、わかる気がした。
「綿菓子、買えたようだな。よかったな」
「うん。おまけももらっちゃった。鏡にもあげる」
綿菓子をちぎって俺に渡そうとする。
「おいおい、溶けるだろ」
佐山の手からぱくりと綿菓子を食べる。甘い砂糖の味が口にいっぱい広がった。
近くで見た佐山の手は綿菓子のように白くて。
嬉しそうな笑顔を俺に向けてくれて。
自分でも知らなかった気持ちが現れてくる気がした。
そのとき、大きな音がした。
「わぁ……」

俺の後ろを見つめる佐山。歩いてきた階段の向こうに、丸い赤や紫、黄色い光が浮かぶ。
神社のある反対側は高台なので空がある。その先には川が流れていて。そこで花火が打ち上げられているようだ。
神社から見ると正面に花火が広がって見える。

「なるほど。ここから見るとほんと神社で花火をしているような感じだな」

「綺麗……」

どーん、どーんと大きな音とともに大きな花が咲く。
花火の光に照らされた佐山の横顔は、大きな瞳がキラキラと輝いていて。
俺はなんとはなしに、佐山の左手を握って。
佐山は優しく握り返して。指を絡ませていた。

二人のキモチ

花火大会も終わり、帰り道を二人で歩いていた。
佐山の家は知っている。
こんなに遅くなってしまったからには、佐山といえど、家まで送ってやったほうが良いだろう。
俺が、誘ったしな。

「思ったより、楽しかったな」

「うん」

「たまには、こういうところに行くのも楽しいな」

「そうだね……」

しばらく、誰も通らない、暗い並木道を歩く。遠くでカエルの鳴く声がする。
俺の2歩くらい後ろからついてくる佐山。
からころと佐山のはいている下駄の音が聞こえる。
何も話さなくて。さっきまで、元気だったことを思い出して、しんみりとしてくる。
佐山は今、何を考えているんだろう。

「……鏡。私を何処かに誘ってくれたの、初めてだよね」

「えっ？　そうだったか？」

「うん。初めてだよ」

そうか。いつも何処かに出かけていたの、佐山が俺を誘っていたからか……。

「そうか。でも楽しくてよかったな」

「うん。ほんと、楽しかった。このお祭りに誘ってくれて。鏡、私を初めて褒めてくれたし」

聞こえていたのか、あれ……。

「勇気出して、着てきてよかった」

後ろから、佐山の声が聞こえていて。

俺は佐山に、なんて言ってあげたら良いんだろう。言葉が浮かんでこない。

いつも見ていた佐山だったから。

それがいつしか当たり前のようになっていて。

佐山は、俺の……。

わからない。

こんな気持ち、初めてだ。

心臓がドキドキして張り裂けそうになる。

自分が何を思って、意識しているのか理解できない。言葉に出来ない。

ただ、そばにいてくれるこの女の子のことだけが、俺の頭の中を駆け巡っていた。

やがて、佐山の家についた。

「鏡。今日はほんとありがとう」

「ああ。俺も楽しかった」
「また……。あしたね」
「そうだな。また明日、学校でな」
「うん……」
俯いたまま、家に入ろうとしない。
「どうしたんだ？」
ふと、俺を見上げた。
「……鏡」
すごくまじめそうな顔になって。
俺を見つめて。
まるでいつもの佐山じゃないみたいだ。
一歩。佐山が前に来る。
佐山はじっと俺をみつめていて。
俺もじっと佐山をみつめていた。
何かを望んでいるような。
何かを言いたいような。
でもどこか切なくて。
街灯に照らす彼女の瞳は輝いて。
瞳がかすかに揺れている。
いつも知っていた佐山。
でも、今日は、俺の知らならなかった佐山をたくさん見て。

すごく、女の子を感じて。
自分でも、すごく緊張しているのがわかる。
手を伸ばせば、届く距離。
俺は、そっと、佐山の手を取って……指を絡めた。

佐山は、ここにいる。

「佐山……」

佐山は何も言わなくて。
ただじっと俺の瞳を見つめていた。
佐山は、きっと、俺と同じ気持ちなのかもしれない。
どうしてだかわからないけど、それがわかる気がした。

ふと。

握っていた手を胸の前に寄せて。

佐山が背伸びして。

佐山が、俺の目の前にいて。

俺の唇が。

暖かくて、柔らかい感覚に包まれた。

「……おやすみっ！」

踵を返し、玄関に入っていく。
そして、扉の前で振り返って。

「また……あしたね」

玄関の明かりが消えても、俺はそこにしばらく佇んでいた。

想い

家に戻ってきても、振り向いた佐山の笑顔が頭から離れなかった。
花畑で流れる風のような、甘い香り。繋いだ手のぬくもり。俺の心に沁みていて。今でも佐山がそばにいてくれているように感じていた。
そして。

暖かくて、柔らかい感触。

自分の唇をなでてみる。
俺、佐山と……。
いつしか俺のそばにいた女の子。いつも振り回されていて、いろんなバカ言って。
怒ってふくれたり、困ったり。笑ったり、喜んだり。
そんな、佐山が可笑しくて。
楽しかった。
本当は、いつも佐山を探していた。いつも声をかけてくれていたことに、安心していた。
俺を、笑顔で見てくれることが、嬉しかった。
佐山沙希っていう女の子が、いてくれることが。
これが、幸せって、ことなんだろうか。
これが……。
佐山の笑顔がちらつく。
心が穏やかになって、優しい気持ちに包まれてくる。
また、明日から、佐山はいつもの佐山でいてくれるのだろうか。
俺も、いつもの俺でいてもいいのだろうか。
自信がない。
でも、いつもより、あの女の子が笑顔になってくれるように、い

ろんなことをしてあげられたら。いつもより、きっと楽しい毎日が、待っていると、思う。
また、明日。か。
佐山、また、明日、な……。

――――

――この本を読んで、私もこんな二人になりたいって思った。

いつも仲が良くて。
楽しくて。
本当は、女の子が、男の子のことを好きで。気がついてない振りしてる男の子にやきもきして。
男の子は女の子のことが好きなんだけど、自分の気持ちに素直ではなくて。
そして、お互い言い出せなくて。恥ずかしいから、冗談のように受け返してしまう。
ただ好きな人と一緒にいられる幸せを壊したくなくて。ずっとこんな毎日が続いていけばいいってだけ、思ってる。
そんな。
恋なのか、憧れなのか、曖昧な甘い二人に、なってみたかった。
ドキドキするような、甘い、恋。
私も、こんな風に、恋してもいいかな。勇気、出せるかな。
私も、ここに出てくる女の子のように、明るくなれれば、きっと……。

虫の知らせ

――誰も通らない。薄暗い夜道。

静かで、あたりはひっそりとして。なにもないことへの少しの恐怖があった。なるべく明るいところを探して、早足で歩いていた。

ふと、一台の車が後ろから走ってきた。車の音が、ゆっくりと近づいてくる。

なんだか怖くなって、小走りでここを抜けようとした。

ワゴンタイプの少し大きい黒い車だった。

車が右横を抜けていく。

車が通りすぎるのを見て少し安心した。

でも。

そのとき。

その車は、目の前で急に止まった。

金髪の男が扉を開け、掴みかかってきた。

声を上げようとしたら、何かを口にはさまれて、声を出せなくなった。

すごい力で、車に押し込まれた。

座席に倒され、覆いかぶさられ、身動きできなくなった。

押さえつけられた腕や肩を振りほどこうと懸命にもがいても、動けなかった。

「おとなしくしろっ！」

がつんと、拳で顔を殴られたみたいだった。

口の中に、鉄の……、血の味がした。

痛いとか、あまり感じなかった。

殴られて、驚いて。
今、何をされて、何をされようとしているのか、理解し始めた。
怖い。
足が、腰が、震えて。
力が入らない。
力が入らなくなった体を男が触ってくる。
胸、腰、足……。
強く握られ。
痛くて。
気持ち悪くて。
嫌！
やめて！
精一杯体に力を入れてもがいた。
でも、スカートの中に手を入れられて。ブラウスのボタンを引きちぎられて。
両腕を押さえられて。
ナイフのようなもので下着を切られて。
腰を上げて逃げようとしても、足を肩を押さえつけられた。

生暖かいものが触れた。
怖くて。
嫌で。
やめて。やめて。やめて……。

痛い！

ひどい痛みが襲ってきた。
体が裂けていくような酷い痛み。
逃げようとしても。
もがいても。

痛みはなくならなかった。
押さえつけられて、動けなくて。
痛くて痛くて。
男が、やみくもに動いていた。
引き裂かれて。
痛くて。
気持ち悪くて。
辛い。
怖くて怖くて。
この痛みから逃れたくて。
今、起こってることが、信じられなくて。
今すぐに、この痛みを終わらせて欲しい。
長い間。
ずっと痛くて。怖くて。
やがて。
中で動いていたものが、止まって。
びくっ、びくっと震えていて。
生暖かくて、気持ち悪いものが、奥で弾けていた。

――――

「佐山っ！」

がばっと体を起こしたら、暗闇と静寂だけがあった。
遠くでカエルの鳴く声がする。
俺の体は汗がびっしょりで、着ているシャツが肌につき、不快だった。

「ゆ、夢……？」

はぁはぁと、自分の息が聞こえる。
今、見ていたのは、夢だったのか？
暗い夜道を歩いていて。
急に男達に車に乗せられて。
乱暴されて……。
ぞくりと背筋が震える。
俺は男だが、そのときの感覚がすごく鮮明で、今でも俺の体のところどころで痛みを感じるくらい、リアルで、現実感があった夢だった。
しかも、その乱暴にあっていたのが……。
首を振る。
しかし、例えようの無い不安から、くしゃくしゃになった頭をかいた。
鼓動が収まらない。
落ち着け。夢なんだ。
それに、佐山はちゃんと家に入るまで送った。そんなこと、あるはず無い。
しかし、そんな夢を見るなんて。俺もどうかしてる。

ぷるるるる……。ぷるるるる……。

突然の電話の音に、驚いた。誰が、こんな時間に電話を。
部屋の明かりをつけ、机の上においておいた携帯を取り出す。
佐山の、自宅からだった。
こんな時間に、何だ……。

「もしもし」

「もしもし？　秋月さん？」

「佐山？」

「うちの、沙希、そちらに行っていませんでしょうか」

「えっ？」

酷く慌てたような口調で、声も大きくて。

佐山の声に似ていたが、少し大人っぽい声だった。

そして、沙希という名前を言うのなら。

「佐山の、お母さん？」

「はい。すみません。沙希が出かけたっきり帰ってこなくて。何の連絡も無くて……。こんな夜中にほんとすみません」

「佐山が、いない？」

「そうなんです。そちらにお邪魔していませんでしょうか」

家にいないって……。

時計を見る。２時１５分。

背筋が凍りついた。

「いや、うちには来てません。さっき帰ってその後また何処かに？」

「そうなんです。忘れ物したからって。すぐ戻るって言ってたけど、それきり……。どこへ行くかも言わないで……。他の知り合いにかけてみたのですけれど、どこにもいないらしくて。私、もう心配で心配で」

「警察とかには連絡しました？」

「はい……」

「俺も探しに行きます！　佐山の行きそうなところに！　お母さんは家で連絡を待っていてください！」

「すみません、すみません……」

あいつ……。

俺は濡れたシャツを投げ、暗闇の世界に飛び出した。

伝えたい、言葉

忘れ物って何だよ！　こんな夜に！
家を飛び出しながら佐山の携帯に何度もかけた。
『あなたのおかけになった電話は、電波の届かないところにいるか、電源が入っていないため……』
携帯の意味がねぇじゃねぇかよ！
さっき見ていた夢がまさか……。背筋が震え、鳥肌が立つ。
違う！　そんなことあるはずはない！
佐山を見つけられればわかることだ！
走った。

学校。
……誰もいない。

よく行くコンビニ。
一人のサラリーマン風の人が立ち読みをしていた。店員に聞いてみたが、若い女の子は来ていないと言う。

カラオケボックス。
店は2時までだった。シャッターが下ろされ、閉まっていた。

プラタナスの並木道。
誰一人歩いていない。

さっき来た神社。
露店も仕舞われ、誰もいなかった。

走り回った。

佐山と行ったところ。行きそうなところ。

いない。

どこにもいない……。

一人、走り続けた。

どこへ行ったんだよ！

何度も佐山の自宅に電話を入れたが、佐山は帰ってきていないと訊いた。

佐山の携帯にかけても、同じアナウンスが流れるだけだった。

一晩中走り回って……。

道端で、仰向けに倒れた。

ぜーぜーと自分の息が聞こえる。

ここはどこだろう。

空が明るくなって。遠くで鳥の声がしている……。

「馬鹿……。どこに行っちまったんだよ……」

――――

その日の学校。

俺はまさかとも思い、重い体を引きずって、学校へと向かった。

また明日、学校でって言った約束を胸に。

しかし、やはり佐山は学校に姿を見せなかった。

家に帰り、佐山の自宅に電話しても、誰も出なくなっていた。
次の日も。そのまた次の日も。
まったく同じ、佐山のいない毎日が過ぎた。

「なあ、佐山さん、どうしたんだ？　最近、学校に来ていないじゃないか」
心配そうに俺に訊く吾妻。
「うるせぇよ。俺に聞くんじゃねぇよ」
「お前ら、何かあったのか？」
「しらねぇよ！」
癇にさわって、前にあった机を思いっきり蹴った。
すごい音の後、喧騒が静かになり、視線が俺に集中したのがわかった。
「お、おい……」
「……。すまん……」

イライラが募って、八つ当たりしている。

どこへいっちまったんだよ。
何度もメールもした。何度も電話もかけた。
でも、メールは返ってこなかったし、電話も同じアナウンスをするだけだった。

あの夢のことがすごく気になって。
今すぐにでも、佐山の元気な姿を見たいというのに。

一週間が過ぎた頃。
明日から夏休みという日だった。

担任の先生が、佐山が学校を辞めたことを告げた。

――――

学校の帰りに佐山の家に行ってみたが、表札がはずされ、空き家になっていた。

連絡もなくて、突然いなくなってしまった。

あの夏祭りの日、この玄関でみた佐山の笑顔が思い浮かぶ。

あのとき、俺にしたことは、なんだったんだよ。
なんで、何にも言わねぇんだよ。
また明日って約束したじゃねぇかよ。
胸をかきむしりたくなるような焦燥感。

佐山に逢いたくて。
佐山の笑顔が見たくて……。

『秋月鏡だって。似合わない～』
『うるせー。俺が望んだわけじゃねぇ』
『あはは。そうだよね。でも、秋月ってなんか読みにくいし。鏡って呼ぶ』
『ああ、好きにしろ』
屈託のない笑顔で俺をそう呼んで。
なにかと俺を呼んで。
『鏡。駅前に新しいカラオケボックスが出来たんだって、行こ』
『あー。何で俺なんだよ』
『暇そうだから』

『うるせーよ』
『いこー』
『あーわかったわかった。安いんだろうな』
『うん』

馬鹿……。
俺は、お前がいてくれて、毎日、すごく癒されていたんだよ。楽しかったんだよ。

俺、お前に、伝えたいことがあるんだよ。だから、いつものように、俺に笑顔を見せてくれよ。今まで言えなかった言葉があるんだよ。それを聞いてからでもいいじゃねぇかよ。
それも、何も言わずいなくなっちまうなんて。何か言ってからでもいいじゃねぇかよ……。

俺……、ふられちまったのかな。

携帯を握り、電気もつけない薄暗い部屋でうずくまる俺に、一冊の本が目に入ってきた。
手にとってみる。

『鏡』という小説。

借りてからもうだいぶ経って、返却期限がとうに過ぎてしまっていた。
忘れていたのも無理はない。
でも、あの日、佐山がどうしても読ませたいって言っていた本。
今はまだ本なんか読む気分にとてもなれなかったが……。

開いて、みた。

行方

図書館に行くことにした。この本を頂くことは出来ないかと。
しかし、佐山に連れられて行ったはずの場所は、なにもなかった。
驚いた。目を疑った。
ここは確かに、佐山の後を付いていって辿りついた場所だ。
でも、今、俺の前にあるのは、砂利に草が生えている、空き地だけ。
ここにはあの涼しかった図書館があったはずだ。俺の右手に持つ本を借りたはずだから、夢を見ていたとかそんなことはないはずだ。
場所を間違えたのだろうか。
近くの歩いている人にこの辺に図書館がなかったかと訊いてみた。ここではなく、ずいぶん遠くにあることを聞いた。ここからバスに乗って行かなければならないくらい遠いという。
どういう、ことなのだろう。
佐山といたカラオケボックスはここだ。この先にプラタナスの並木道がある。
並木道の先の交差点を右に曲がって……。
おかしい。
記憶を頼りに歩いてみても、その先はやっぱり空き地だった。

遠いと言われた図書館に行ってみた。
でも、あの時見た図書館とは形が全然違っていた。
中もあのときじっくりと見た本棚とはかけ離れていて、俺の頭より低かった。
本の事を司書さんに聞いてみても、この本は蔵書にはないと言われた。
わからない。どうしてだ？
あのとき、借りた本は確かにここにある。

ただ、借りたという手続きの痕跡だけがなくなっている。
混乱する。
まるで、俺が、別の世界に紛れ込んでしまったような……。
背筋がぞくりとして鳥肌が立ってくる。
もしかしたら、いなくなってしまったのは佐山ではなくて……。
俺、が……？
頭を振る。
そんなこと、現実であるわけは無い。何かの勘違いだ。
きっと、どこかで道を間違えて、図書館っぽいところが他にもあったのだろう。
借りたことは事実なんだし、返却を忘れていたりしたら、図書館から連絡が来るはずだ。手続きのときに電話番号とか書いたはず。
釈然としないところがあるが、この本はしばらく持っていることが出来そうだった。

この本を持っていれば、佐山とのつながりが、いつかきっとできる。なぜだかそう思える。
佐山は生きている。
いまも、きっと、どこかで。
俺は絶対忘れない。
そして、佐山を探し出してみせる。
そして、あのとき、言えなかった言葉を、伝えたい。
何年経っても。思い出となっても……。

――――

あれから、どのくらい時間が経ったのだろう。
体中が痛くて。
生臭い、栗の花の匂いが、私の服に、体にこびりついていて。
暗い中に、ひとり。

自分に起こったことが信じられなくて。
頭が真っ白で。
歩いても、体が痛くて。
いくら体を洗っても、栗の花の匂いがした。
何度も洗った。流した。
けれど、私の体の中に染み付いていて。
生きていられたことは嬉しかったけど。
心も、体も、嫌気が差して。
死んでしまったほうが、良かったかも、なんて思って……。
気がついたら、この病室で、天井を見上げているだけだった。

そんな、ある日。
いつの間にいたのか、女の子が寝ている私をのぞきこんでいた。

「こんにちはっ」
屈託の無い笑顔を見せて。
「ねぇ。この本を、読んでみてよ」
「あなたは……？」
「きっと、この本が、あなたの未来を変えてくれると思う」
「私の、未来？」
「うん。きっと」

手をさし伸ばして。
その先には。

『鏡』と書かれた本があった。

出逢い

佐山がいなくなって、４年が過ぎた。

俺には空虚な月日だった。

佐山を探して。でも痕跡すら見つからなくて。学校のみんなも、次第に佐山のことを忘れていって。

でも、俺は。ずっと佐山のことを想っていた。

いつか佐山に出逢えることを信じて、佐山に、俺がいかにすごいい男だと思われるように勉強に明け暮れ、いろんなことに努力した。高校でも、お前より成績をよくして。有名な大学にも出て。

佐山。お前が今の俺を見たらどう思うだろうな。すごいと思うのだろうか。今のお前は、何をしているんだ。

俺は、ここにいるぞ。ずっと待ってる。探している。

他に好きな男とか出来ていてもいい。元気でいてくれさえすれば。笑顔を見せていてくれれば。

だけど、俺は色々変わってしまったが、心は、気持ちは、あのときのままだからな。

俺はこれからも、お前にすごい男だと思わせるために、がんばっていくからな。

そして。

今日から社会に出て働くようになる。

なんとかという日本を代表するような大会社。

今日は、その入社式。

体育館くらい大きな部屋に１０数人くらいの俺と同じ新入社員が、真新しいスーツ姿で並んで座っていた。

俺もその中の一人になっていた。

これから式が始まる。

ふと、隣に座っている人を見た。

そこには、思いがけない人が、いた。
数年経っても、忘れることが無い女の子。
どんなときも忘れたことがない。探し続けた女の子が、そこにいた。
髪が少し伸び、肩までの黒い髪。紺のスーツを着て。
俺の隣に。

佐山沙希という女の子が。

「佐山……？」
「えっ？」
佐山の名を呼ぶ俺に視線を移す。
見知った瞳。髪は伸びてはいるが、顔立ち、輪郭……。
俺の記憶の佐山のままだった。
「佐山！　さやまっ！」
「えっ……」
急に立ち上がった俺を見て驚いた表情をしていた。
「お前……。こんなところにいるなんて……。佐山……。よかった……」
嬉しくて、ほっとして。まぶたに熱いものを感じてくる。
どんなに、この女の子のことを探していたか、待っていたか……。
今まで色々言いたいこと、伝えたいこと、たくさんあったのに、みんな忘れてしまった。
でも、佐山がいてくれて。
あの日突然いなくなってしまった不安が、今になって、ようやく溶かされた気持ちになって。
俺は、俺は……。
「ち、ちょっと、待ってください。すみませんが、どなたかと勘違いされていませんか」
「えっ……？」

「私の名前は、『高嶺沙耶（たかねさや）』といいます。さや……とか言われていたようですけど、私はあなたのことは知りません。初めてお会いします」
落ち着いた口調で、表情もそのままで。俺をなだめるようにそう言った。
「たかね、さん……？　でも。佐山なんだろ？　冗談は」
「すみませんけど、本当にあなたのことは知りません。どうか、落ち着いてください」
佐山……じゃない？
落ち着いた物腰。穏やかな口調。確かに、俺の知っている佐山は、こんな性格じゃない。
でも、でも。
「佐山じゃ……ないのか？　俺だよ、鏡だよ」
「はい。すみません。私、あなたのこと、本当に知りません。何処かでお会いしていましたか？」
俺を見て慌てる様子もなく、困ったような表情を見せている。
この女の子をどう見ても佐山としか見えない。
でも、違う人だと言う。俺を知らないと言う。
４年という間に俺のことを忘れてしまったのか？　それとも、本当に別の女の子なのか？
頭が混乱する。
佐山だけど、佐山じゃないなんて。
俺はどうしたらいいんだ！
俺は、頭を抱えた……。
「大丈夫、ですか？」
佐山じゃないのなら、俺はほんとにただ取り乱したおかしい男としか見えないだろう。
こんなところで、取り乱したりしても、何にもならないが……。
「あ、ああ……。知り合いに似ていたもので……。取り乱したりしてすまない」

混乱と驚きで、鼓動が早くなるのを懸命に抑えて、俺は椅子に座った。
今は、そうするしかないだろう。
「そうなんですか。そんなに似ている人なんですか」
「そうなんだ……。すまない。ああ、俺の名前は『秋月鏡』」
「あきつき、きょう……。ずいぶん詩的な名前なんですね」
「あ、ありがとう……」
笑みを俺に見せた。その笑顔も、俺の知ってる女の子のようで……。
納得できなくて。
佐山に間違いなくて。
でも、違う人だと言って。
いいさ。
この会社で一緒になったってことだから、これから色々と聞くことが出来る。
佐山の笑顔を、違う人と言ったが……、見ることが出来て、俺は少しだけ、安心していた。

詮索

チャンスだった。

俺の配属されたのは営業部で、佐山……、じゃない、高嶺さんと言ったか、と一緒の部署につくことが出来た。

この部署で新入社員であったのは俺と高嶺さんだけだったし、これから色々と話せることが出来る。

「高嶺さんといったかな。さっきはすまなかった。偶然か、同じ部署みたいだからいろいろとよろしく頼む」

今日の仕事の説明とか研修とかも終わって、帰り支度をし始めていたとき、俺は高嶺さんに話しかけてみた。

「いいえ。私こそよろしくお願いします。秋月さん仕事できそうですから、足を引っ張るかもしれませんけれど、どうぞよろしくお願いします」

他人行儀で俺を知っている様子を微塵も感じさせない口調。

本当に、佐山とは違う女の子なのだろうか。

それにしても、本当によく似ている。

背の高さも佐山と同じで。

声も、佐山で。

本当に別人だとしたのなら、まるで佐山を鏡に映したようだ。

「……高嶺さん、姉妹とかいるのか？」

「えっ？　私は姉妹はいません。歳の離れた弟がいるだけです。でも、突然そんなこと訊いてどうしたのですか？」

怪訝な目で俺を見る。そうだな、突然家族の事を訊いたりして、失礼だったな。

「いや、すまない。変なことを訊いた。ただ、見れば見るほどそっくりでさ、姉妹でもいたのかなと」

佐山には兄弟姉妹はいなかったのに。何を訊いているんだ、俺は。

「そんなに似ているのですか。さっき言っていた人と私」

「ああ。本当にそっくりだ」

「秋月さんの恋人さんとかなのですか？」

「えっ」

「なんだか大事な人って感じで……。さっき必死だったから」

佐山の顔でそんなことを言われるなんて。心に刺さる言葉とは、こういうことをいうのだろうか。

「そんな、良いものじゃない」

「あ、ごめんなさい……」

俺の表情を読み取ったのか、高嶺さんは申し訳なさそうに言う。

「ああ、いや、そういうわけじゃないんだ。すまなかった。気にしないでくれ」

「でも、そんなに似ているのなら、逢ってみたいですね」

「あ、ああ……。そうだな。逢わせてみたい」

佐山がとぼけていたり、俺に冗談を言っている様子ではなかった。本当に、俺と初対面で何も知らない感じだ。

それとも、佐山がなんらかの事故とかにあって、記憶を失ってしまったとか……。

いや、そんなこと、現実で早々あるはずがない。

やはり、別人と思う方が良いかもしれない。

佐山だと思って高嶺さんに接してしまうと、彼女に失礼になるだろう。

それにもう、余計な詮索はしないほうがよさそうだ。

俺に、出来るだろうか。

あの日から、佐山を探して、待っていて。まだこれからもその気持ちのままで。

その佐山とそっくりな女の子が近くにいるなんて。

佐山。本当にどこへ行ってしまったんだよ。お前がいないから、俺はこんな気持ちになるんじゃないか。

変れる心

次の日。

昨日今日の午前中で仕事の流れなどを教えてもらい、午後からは簡単な仕事を割り振られ、俺と高嶺さんは書類とにらめっこをすることになった。

俺の左隣で仕事をしている高嶺さん。真剣な眼差しで書類を見つめている。

そんな横顔を見ていても、佐山に見えて仕方がない。

もし、佐山と一緒に仕事をしていたら、こんな感じになっていたのだろうか。

「さやま……、じゃなかった、高嶺さん。この書類どうしたっけ」

「もうっ。名前の方で呼ばれたと思ってびっくりした」

ちょっと怒ったような表情で俺に向く。

つい間違えて佐山と言ってしまった。

「ああ、すまない。高嶺さんって言いづらいんだよ。沙耶って名前で呼んでいいか？」

「えっ？」

「いいや、勝手に呼ぶからよろしく」

「ちょ、ちょっと……」

「迷惑か？」

「いえ、そう言うわけではないのですけど……」

「あ、あと、その他人行儀な言い方もなるべくならやめて欲しい。同じ立場だし、なんだかそう言われるのに慣れなくて」

「秋月さん」
「なんだ？」
高嶺さんは俺の言葉に細い眉をしかめ、毅然とした言葉で続けた。
「ここは会社ですよ？　社会の中です。そんな学生みたいなこと言わないで下さい」
「……それはそうだが」
律儀だな。
「まったく、男の人って、みんなこうなの？」
膨れて、俺にそっぽを向く。
「あー、すまん、気を悪くしたら謝る……。ただそのほうが気が楽になると思ってさ。仕事だからって、そんな肩肘張るのも疲れないか？　俺も分別はわきまえるからさ。外ではそんなことはしない。約束する」
「あ……その、ごめんなさい」
「えっ？」
急に俯いて淋しそうな表情を見せる高嶺さん。何か悪いことをした、申し訳ないといった感じだ。
「秋月さん、色々気を使ってくれたのですね」
ああ、そうか。
「まあ、仕事熱心なのは良いけれど、あまり神経質になるのも疲れちゃうからさ。楽に行こう」
「はい。ありがとうございます」

ふと、高嶺さんの表情がほころんだ。
その笑顔の瞳が、佐山とかぶって。
俺の心にささくれ立ったような痛みが走る。

「ちがうちがう。ありがとう、だけでいいって」
「はい」
「もっとくだけよう。な」

「はい。そうします」

嬉しいけれど、それに喜んではいけない。そんな葛藤が駆け巡る。
この靄みたいなものは、なくせないのか。
振り払おうにも、俺の中のなにかがそれを許してくれなかった。

再び、書類に目を落としても、頭に入っていかなかった。

「どうしたの？」
眉間に指を当てた俺を怪訝に思ったのか、心配げに俺に問いかける。
「あ、ああ、すまない……」
さっきまでの堅苦しい物言いじゃなくなってる。それが嬉しい反面、思い出すことは変わらなかった。
「疲れてない？　ちょっと休んだら？」
「そうだな、ありがとう。一息入れてくる」
背広の内ポケットをまさぐり、タバコとライターを取り出した。
確かこの会社では喫煙室があったはずだ。新入社員でという躊躇があったけれど、そこに行きたくなった。
「あら、タバコ吸うの？」
「ん？　ああ」
「だめだよ。体に悪いよ」

体に、悪い。か。
そういえばタバコを吸い始めたのはいつだったろうか。
学生の頃、吸っていた奴らを見て、あんな体に害のあるもの吸うものかと思っていたのだが。
そうか。
佐山がいなくなって、俺、自分を傷つけたくなって。
半ば自虐的に吸うようになったんだった。

「タバコ……。やめたほうがいいか？」
「何か理由があるんだったら、とめないけど」
「いや……。吸っていても何も得することはない。やめることにする」
「ごめんね。いやな女だと思った？」
「いや。そんなことはない。言ってくれて感謝さえしてる」

俺も変わらなくちゃいけない、か。
何本か残っていたタバコの箱を握り締めて、ゴミ箱に投げ入れた。

仕事の中で

この会社に入って一ヶ月が過ぎていた。
仕事にも慣れ、一人で仕事を任せられることも多くなってきた。
沙耶との間柄も変わりが無く。でも、心の中にある違和感は無くせなくて。
気持ちは抑えようとしても、宙ぶらりんのような足元がつかないはっきりしない気持ちが今の俺を包んでいる。
佐山への気持ちも、消せなくて。
沙耶に、どうすれば良いのか、どうしたいのか、自分でもよくわからない。

ふう、と一息ついて書類をとんとんと束ね、留める。

「……うん、俺の仕事はばっちりだ」

だから、こうして、仕事に集中しようとして、日々を過ごしていた。

営業といっても取引先を回ったりということだけじゃなくて、プレゼンなどでの資料を集めたり、色々な統計を取ったり、そうした書面を起こすなどの仕事が色々あった。売り込む仕事もある。
仕事を知るにつれ、忙しいということがわかってきた。
今の俺にとって、こうした忙しさは悪くは無かった。

ふと、沙耶のしていた書類を見てみると、さすがに彼女はしっかりと終わらせているようだった。
今日は沙耶は家の事情ということで、お休みになっている。俺一

人で仕事をするのは初めてかもしれない。
色々落ち着かせる時間が出来て、安心したような淋しいようなそんな気持ちだった。

俺は、終えた仕事を顧みて間違っているところは無いかとチェックしてみた。

「……あれ？　何処かおかしい？」

統計のところ。よく見たら合計の割合の数字がおかしい。ありえない数字が出ている。
計算はパソコンでしてくれるので間違いは無いはずだ。

沙耶の作った表がおかしいのか？

電卓を取り出し、計算してみる。
と、そこまで行かなかった。

表の一つ目から数字がずれている。全部一つずつ。
それで合計が合わない。

この表を見て、可笑しくなってしまった。笑みがこぼれる。
そういえば、佐山もテストの答案、一つずつずれてしまい、０点を取ったことがあったっけ。
こんなところでも、似ているなんてな。
佐山よりしっかりしているように見える沙耶だけど。こんなところもあるんだな。
っと、こんな書類を見ていてニヤニヤしている場合じゃない。
この表が間違っているとしたら、ほぼ全部の書類を書き直さないといけなくなる。

この書類を使うプレゼンは明日のはず。

時計を見た。

時間は終業時刻。

しょうがないか。

佐山のことを思い出して、心が暖かいうちに、終わらせよう。

でも、頭に思い浮かべたのは、佐山の笑顔ではなく、あの女の子の笑顔だった。

――

次の日。

「おはよう。今日は早いな」

「秋月さん！」

「鏡でいいって」

「も、もう。それより、ごめんなさい。大変なことが」

朝、出社して、沙耶の顔をみたとたん、沙耶が切羽詰ったような慌てたような表情で俺に詰め寄ってくる。

「どうしたんだ？」

「あの、私、書類間違えててしまって……」

「書類？」

「そうなの、今日これからのプレゼンの、書類が」

おろおろして、何を言いたいのか自分でもよくわかっていないのだろう。

いつも整頓されている沙耶の机が書類でごった返している。

こんな一面も持っているんだな。

沙耶をかわいいと思ってしまった。
「その書類って、このことか？」
俺はかばんの中から昨日の書類を取り出した。
「そうなの！　それが、この書類から間違っていて……」
「どこも間違えていないぞ。見てみて」
「えっ……？」
俺の書類を受け取り、目を動かしている。
「あれ……？　あってる……」
「な。大丈夫だろ？」
「でも、私のこの書類、間違えていたの。秋月さんに渡したの、私の書類のコピーだし」
「気がついちまったか。ちょっと残念」
「えっ？」
「実はさ、昨日仕事終えたときに気がついたんだ」
「それじゃ、直して、くれた……の？」
「プレゼン終わるまで黙っておこうと思ったけど。さすがに仕事熱心だな」
「そんな、私、秋月さんに迷惑を……」
「ちげーよ。俺はもうちょっと邪で腹黒だからな」
「えっ？」
「俺も多分、仕事をいつか間違えたり失敗してしまうことがあると思う。でもそのとき、一緒にいてくれている沙耶がいてくれるから、俺は間違えたりしてしまう不安を持たなくて安心して仕事が出来ているんだ。だから、今度俺が間違えたりしたら、頼みたい。そんな画策してた」
「秋月さん……」
「だからな、もっと俺のことも信用してくれ。俺も沙耶を頼るから。二人でやってる仕事だろ？」
「ありがとう……」

恥ずかしそうに、でも、俺の方に、笑顔を向けてくれた。
今まで見たことの無い、沙耶の笑顔だった。

沙耶と佐山

日が傾いて、世界が赤く染まり始めている。
今日も暖かくなって、もうまもなくあのセミの声が聞こえる日々になるのか。

「今日はほんとごめんなさい」
「気にするなって。おかげで久しぶりにおいしいお酒が飲めそうだ」
「もう……」

あの時とは違う女の子と、プラタナスの並木道を歩いている。
時が過ぎても景色はほとんど変らないのに。

俺達がこうして歩いているのは、沙耶がどうしてもお礼をしたいと言ってきかないので、仕事が上手くいった打ち上げと名目して二人でお酒でもということで、こうして出かけることになったからだ。

「そういえば秋月さんってお酒飲めるの？」
俺の左側で見上げる沙耶。夕日が沙耶の頬を赤く染めている。
「一応今年で２４歳になるのだが、そんなに若く見えるか？」
「そういう意味で言ったんじゃないけど……。でも、２４歳だったのね。そうすると私の方が一つ年上になるのね」
「ええっ！？　同じ歳じゃなかったのか？」
「高校時代にちょっと色々あってね……」
少し、瞳が哀しげに映った。
余計な詮索か。
「そうなのか。それにしても、先輩だったとは。意外だ」
「む。なに？　私子供っぽいとか言うの？」

「い、いや、そんなことはないのだが……」
「秋月君が子供っぽいのよ」
なんだか急に言葉がお姉さんっぽくなったような。
実際、長い黒髪が風に靡いて輝いていて。黒いタイトスカートのスーツが似合っている。清楚で、可憐で……。本当に綺麗なお姉さんという印象だ。
ちょっと待てよ。
実際のところ、沙耶はとても綺麗でかわいい。体の線は細くて、手足が長くて。
佐山に似ているのだから、当然か。
俺も、本当は佐山のことを、こういうふうに思っていたのか。
綺麗な、かわいい女の子だって。
そういえば以前、他の同僚にあんな綺麗な女の子と一緒だなんてうらやましいとか言われたこともあった。
こんな女の子と一緒に飲みに行けるのか。
嬉しいような、恥ずかしいような気持ちだった。

ふと、沙耶に、彼氏とかいるのか――と訊きたくなったが、何故か訊くことが怖くて、言葉を飲み込んだ。

――

「いいお店、知っているのね」
「そうだろ？　こうしてゆっくり出来る空間が好きでさ。割と酒も好きだし良く来てる」
「そうなんだ。よろしくね」

行きつけの居酒屋。小部屋に仕切られていて一人で飲むには落ち

着けて好きな店だった。
建物もモダンで大正時代の様式をモチーフにしているとか。料理のメニューもそれに踏襲したもので、雰囲気も独特だった。

俺達は向かい合って席に座った。

「私、日本酒を冷でお願い」
「日本酒なのか。ワインとかカクテルとかみたいのじゃなくて」
「うん。私、お酒好きだし」
「でも、日本酒ってあんま女の子が飲むイメージじゃないだろ」
「そう？」
「まあ、いきなり生中とか頼んで、ぐあーっと飲み干して、かーっ、生きててよかったぁ、なんていうよりましか」
「あはは。でもそれやってみたいかも。気持ちよさそう」
「あー。でも沙耶のイメージに合っているかもな。似合うかもな」
「なによそれー」
膨れた顔をして俺を覗き込む。仕草も、か。
「でも、日本酒を飲む女の子っていいと思うぞ」
「ありがと。なんか、日本酒ってね、清めてくれる気がして好きなんだ」
「清める？」
「うん。ほら、お神酒とか厄払いとかに使うのは日本酒でしょ？だから、私も綺麗にしてくれるような気がしてね」
「なるほどなぁ」
「む。何か私が汚れているとでも？」
「あ、いや、そういうわけじゃなくてな。なんか神秘的なことが好きなの、女の子っぽくていいなと思っただけだ」
それに、なんとなく沙耶に似合っている気がする。古風で和風な……。着物とかも似合いそうだ。
「なに？　それじゃ今まで私を女の子扱いしていなかったってわけ

？」
「あ、いや、そういうわけじゃ……」
「秋月君ってそういう風にみてたんだ」
「あー、俺は泡盛にしとく」
「もー！」

仕事場では見られなかった沙耶との会話。
こんな明るい一面も持っていたんだ。
笑顔もよく見せてくれて。楽しい時間を過ごせそうだった。

「この料理おいしいね」
「そうだろ？　俺のお勧めだからな。俺が作ったわけじゃないけど」
「あはは。秋月君って面白いね」
おちょこを両手で小さく持って、可愛く日本酒を飲んでいる沙耶。
少し頬が赤くなっている。
こういう姿を見せてくれるようになって、俺はなんだか嬉しいような恥ずかしいような、そんな気持ちだった。

「……そういえば、秋月君って、ここ寂蒔市に住んでいるの？」
「そうだけど……」
「驚いた。私も寂蒔市」
「えっ？　そうだったのか？」
「ほら、東の高台に神社があるでしょ？　私の家はそのふもとの先。それにしても、一つ歳が違うだけで会うことって少なくなるのね」
「ふもとの先……、あの並木道の辺りか。近所に住んでいたんだ」
「もう。もっと早くから出逢えてたかもしれないのにね」
「そうだな」
でも、そんな近くに住んでいて見たことがないなんて。佐山に似ていたりしたら気がつくはずなのに。
不思議な気持ちだ。

「そういえば、そこの神社のお祭りの言い伝えって知っているか？」
なんとなく話題を変えたくなって、ふと思ったことを訊いてみた。
「夏のお祭り？　花火大会の」
「そうそう。それ。確か、女の子が浴衣を着て綿菓子を持つとどうなるんだ？」
「この街にいて知らなかったんだ」
「うるさいなー」
「まぁ、男の子だしね。知らなくてもいいのか」
「知っているのなら、教えてくれ。もうずっと気になってて」
結局、あの言い伝えの話は知らないままだったからな。
「良くある話よ。あのお祭りで好きな男の子と出かけることが出来たとき、浴衣を着て、その男の子と綿菓子を一緒に食べて、花火を見るとね、その恋がかなって二人は結ばれるの。中高生の女の子にとっては大事な言い伝えかな」
「あー……やっぱりそんな話だったのか」
なんとなく、わかっていたが、実際そうだったと思うと、心が締め付け、苦しく感じる。
佐山は、俺と……、そうしたかったのか。
「なに？　もしかして行ったことあったとか？」
俺の表情を見て、何かを思ったのか、沙耶は真面目な表情で俺を見つめる。
「いや、そんな言い伝えはやっぱり迷信だろう。間違いないな」
「ふーん、やっぱりそういう女の子がいたのね」
「えっ、いや、その」
「ちょっと、お姉さんに話してみせなさい」
「あの、高嶺さん、酔っていらっしゃいますか？」
「もー！　なんで敬語なのよっ！　それに私酔ってないっ！」
「うひー。すみませんすみません」
「あはははは」

佐山と沙耶。
俺の心は、どこに行けばいいのだろう。
俺は、どうしたいのだろう……。

素直な心。

「ごめんね。誘ったの私なのに。私ばっかりはしゃいじゃって、秋月君に迷惑ばっかりかけちゃって……」
「気にするな。俺もすごく楽しかったしな」
「私、こうして出かけてお酒を飲んだりするの、初めてだったから……」

並木道に響く遠くからのカエルの声。他には俺と沙耶の足音だけが聞こえている。
あの時と、同じ、夜の道。あの時と同じように、数歩後ろを歩く沙耶。

「でも、ほんとありがとう。楽しかったよ」
「ああ。俺もだ。また飲みにいけたら良いな」
「あはは。うん」

しばらく、俺も沙耶も何も話さなくて。楽しいことが終わると寂しい気持ちになってくる。
沙耶も、同じ気持ちなのかな。

「いつか〜　きっと〜　それが勇気にな〜って〜　風に舞う〜　翼に変わる〜」

いつしか、優しく呟くように沙耶が歌っていた。
この歌は、佐山が好きだった歌……。

「その歌、好きなのか？」

「うん……。なんか、この歌がずっと心に残ってる」
「思い出の歌とかなのか？」
「思い出？　そうね……。この歌に、励まされたから、好きになったのかな」
「歌、上手いな。聴いているだけで心地いい。声も綺麗だ」
「えっ……。ありがとう」

俺は、佐山と居た頃を思い出して。
こうして、楽しい時間を過ごして、あの時と同じ夜の並木道を歩いていて。沙耶を送ったら、また彼女は居なくなったり、してしまわないだろうか。
不安で、怖くなる。

「……秋月君。あなたはとっても不思議な人だよね」
「不思議？」
「うん……。不思議だと思うよ」
「どうして？」
「あはは。だって、私が、そう思ったんだもの」

俺の前に出て、いたずらっぽく舌を出して、俺にはにかむような笑顔を見せていた。
やがて、俺の左側に来て、並んで歩き始めた。

「私ね……。本当は、男の人が怖いんだ」
「男の人が、怖い？」
「うん……。でもね、秋月君にはそう思わなかった。だから、こうして一緒に居られるの」
「でも、俺も男だぞ？」
「あはは。うん……」

男の人が、怖い、か。
佐山もそんなことを言っていたな。
「秋月君ってさ……。どうして、いつもそんな顔をしているの？」
「えっ？」
俺の顔を覗き込んでいる。さっきとは違って、少し寂しげな瞳をしている。
「そんな顔をして……。私を見ていないよね」
沙耶が、歩みを止めて、少し離れた。
振り向いて、沙耶を見る。
胸元で両手を握り締めて、俺を見つめていた。
瞳を細くして、今にも泣いてしまうんじゃないかって表情をして。
「あなたは、いつも、私じゃなくて、違う人を見てる。わたし、あなたの思ってる人じゃ、ないんだよ」
沙耶の言葉に、背筋が凍りついたように震えた。
何か答えようと言葉を捜しても、何も出てこなかった。
「でも、優しい瞳で私を見てくれて。優しい言葉をかけてくれて。私だって、女の子なんだよ？　そんなあなたに何も感じないなんて、そんなこと、あるはず、ない……」
沙耶の肩が、遠くからでも震えているのがわかった。
「それなのに、いつもあなたは誰かのことを思ってる。あなたは、私を何だと思っているの？　昔好きだった人の代わりなの？　私、どうしたらいいの？　どうなればいいの？　ねぇ、答えてよ……」

沙耶が、泣いている。小さな肩を震わせて。

そうだよな。

俺、何をしているんだろうな。

沙耶は、あの女の子じゃない。

違う、女の子なんだ。

本当にそっくりだったってことで、いつも傍に居てくれるこの女の子のことを、彼女が言うように、俺は代わりとしてしか見ていなかったのか？

彼女の言うように、俺がいつも沙耶に接していたのは、佐山の代わりだったからか？

俺の本当の気持ちは何だ。

代わりって。違うだろ。

沙耶も佐山も、一人の女の子じゃないか。

それなのに、俺は、いつも沙耶を比べてしまって。沙耶に佐山を探してた。

それは何故なんだ。何故、沙耶が佐山だったらって思っているんだ。

そうか。俺。

『怖かった』んだ。

いつしか沙耶のことを……。想っている俺がいる。

とても綺麗で、かわいくて。素敵な女の子。

話をして。仕事をして。傍に居てくれることが嬉しかった。

想っているからこそ……。同じ女の子でいてほしいと、願っていたんだ。

ずっと傍に居て欲しいから。

離れて欲しくないから。

それは。彼女のこと……。沙耶のことが、好きだって、ことじゃないか。

佐山と似ているってことをきっかけとした……。俺達の出会い。たとえ、似ていなくても、たとえ、全く知らなくて出逢っていたとしても。俺はきっと彼女のことを。

だけど、もう一つだけの、心残り。

佐山。俺はお前のこと、忘れても、いいのか？
お前のこと忘れて。この女の子のことを、愛しても良いのか？

誰も覚えていなく、消えてしまった女の子のことを、俺が忘れてしまっても、いいのか？
お前は、それで、すべて消えてしまうのじゃないか？
それでも、いいのか？
そのとき。声が聞こえたような気がした。

『素直になって、この人を愛してあげて。それが出来るのは、鏡だけなんだから』

そうか。
お前は、幸せなんだろうな。
なら、俺も幸せになってもいいよな。
好きになった女の子のことを、幸せにしてやってもいいよな。

俺はもう、お前を探さない。
ただ、俺達幸せになって。

お前にやきもち焼かせてやるからな。

泣いている沙耶の手を取って。俺は両手でぎゅっと包み込むように握り。

今まで思っていたことを、全て伝えた。

告白

佐山にも言えなかった言葉。
ずっと俺の心の中で想いくすぶっていた言葉。

言葉にしてしまうと怖くて。心から出てしまうと意味が違って聞こえてしまうことが怖くて。
自分のことをうまく表現できなくて。相手のことを思ってしまって。

でも、伝えたくなって。

「ゴメン。俺……。君の言うように、俺、いつも君に、君に似ている女の子のことを見てしまっていた」

一歩、沙耶に近づく。

「その女の子は、昔、突然いなくなってしまった。何も言わず、突然……。そのことを、俺、ずっと引きずってて。君が……。沙耶が、居なくなってしまった、佐山沙希という女の子だったらって願ってしまっていた」

沙耶は俯いたままで。俺の話を聞いてくれている。

「バカだろ、俺。こうなってしまって。君に、色々嫌な思いをさせてしまって。でもやっと気がついたんだ」

そっと……。沙耶の左手を取った。

「沙耶。俺は君のことが好きだ」

「えっ……？」

泣いていた瞳そのままで、俺に向かう。俺の手は沙耶の手を包み込んで握って。

「俺、君の事を、好きになってしまったから。昔、好きだった女の子と重ね合わせてしまって。君があの子だったらって、願ってしまった。そうすることで……。臆病だろ。男らしくないだろ。でも……。やっと気がついた」

握った沙耶の手を俺の胸に抱き寄せるように引き寄せた。

「俺、君のことが……沙耶のことが好きだと。沙耶は俺の大切にしたいと思う、女の子なんだって」

誰かのことを、好きだと伝える意味。

それが、ここにいる女の子へ。

「だから、ほんと、ゴメン……。こんなこと言えた義理じゃないが……。俺の恋人になってくれ」

「鏡……」

「初めて、名前で呼んでくれたな」

目の前に、沙耶の瞳がある。ずっと真摯に俺を見つめてくれてい

る。

「わたし……」

でも、沙耶の体がこわばって、震えていた。握った手からも、それが良くわかる。

「どうしたんだ？」

「ご、ごめんなさい……」

沙耶は蒼白になって。歯が音を立てているくらいに、震えていた。

「私、私……」

「だめ、か……？」

拒否、されたのか……？

刹那、沙耶の長い黒髪が左右に流れた。

「違うの！　違うの……。私、わたし」

そのまま、俺の胸に顔をうずめるようにして、俺の背中を両手で抱えた。

「ごめんなさい……。わたしの、悪い気持ちが」

「悪い、気持ち？」

「わたし、男の人が怖いの……」

そのまま、沙耶の肩を抱き寄せる。震えている。

「私ね、男の人が怖いのは……。昔、襲われたことがあったからなの」

「えっ？」

「昔……。高校生の頃。だから、私。こんなに暗いと、思い出してしまって」

襲われて、いた……？

まさか、あの時見た夢って……。

そうか。そうだったんだ。

「私、そんな女の子だけど、いいの……？」

「大丈夫だ。好きな女の子に、俺、そんなことするつもりなんかないんだぞ。本気で、大切にしたいとさえ……。思ってる。君の昔に何があっても、俺は君が好きなのだから」

「鏡……。ありがとう」

俺の背中に手を回して、ぎゅっとしがみつくように抱き返してくる。

震えていた沙耶の身体が、だんだん落ち着いていくのがわかる。

「暖かい……」

「好きだぞ。沙耶」

「うん。鏡……。わたしも、あなたのことが。好き」

顔を上げた沙耶の瞳が閉じていく。

あの時とは違う、愛しいと思う女の子との口付け。

長く、長く。

互いの気持ちが、一緒だよって伝え合うように。

高嶺沙耶

「私、キスは、あなたが初めて……。こんなにも、素敵なことだったんだね」

俺の首を抱いて、沙耶の吐息が俺の唇にかかっている。
髪からだろうか。流れてくる沙耶の甘い香りに、くらくらしてきてしまう。

再び、沙耶の唇を感じた。

沙耶の部屋。
あの後、俺達は離れたくなくて。沙耶に手をつながれたまま、いつの間にかここにいた。
なんだか、送り狼みたいになってしまった。大事にするなんて言って。俺は。
でも、こんな気持ちはなんて言うのだろう。
目の前にとてもかわいくて綺麗な沙耶の瞳がある。
俺が、初めて、好きだと伝えた女性。
この人が、たまらなく愛しくて、全てが欲しいとさえ思ってしまう……。

「あはは。鏡。今私のこと思ってくれていた」
「えっ？　わかるのか？」
「あなたの、瞳を見ていたら……。わかるよ」

だめだ。そんな笑顔をされたら、俺の、男としての気持ちに押さえが利かなくなってしまう。

どうしたら、良いのだろう。
このまま、流れに任せて、沙耶の体を求めてしまって、沙耶が傷ついたりしてしまわないだろうか。
でも、好きな女の子を求めたい気持ちはとても強くて。そんな相反した葛藤が俺の中を駆け巡っている。

「いいよ」
「えっ？」
「鏡なら……。いいよ。私を」
沙耶の手が、俺の手に触れ、指を絡めるように握り締めた。握った俺の手を両手で包むようにして、胸元に。
沙耶は、俺の心がわかるのだろうか。俺の気持ちを察したように優しい瞳で見つめている。

「どうして、そこまで俺を……？」
「不思議だよね。私も、そう思う。ほんとはね、私も鏡と同じなの」
「俺と同じって……？」
「私、ずっとずっとあこがれていたの。あなたのような素敵な男性が現れて、私を優しく包んでくれる。そんな、夢」

あこがれて、いた……。
俺はずっと佐山を求めていた。
その佐山の生き写しのような沙耶に佐山の姿を合わせて。
いつしか沙耶が俺の心の中に居て。
それが、好きになるという気持ちであることに気がついて。

「でも」

だからといって、沙耶の全てをこのまま……。

「優しいね。鏡はほんと優しい」
沙耶から、俺の唇を求めてきた。
俺に全てを任せている……。
「だから、私、鏡ならいいって、思うの」
その言葉で、不安が吹き飛んだ。
沙耶のベッドにそっと倒した。
沙耶の長い髪が広がって、輝いている。とろんとした瞳で俺を見つめてきている。
そんなにも、俺のことを。
俺も、全て、君に。
俺もゆっくり沙耶に覆いかぶさって。背中からぎゅっと抱きしめた。
沙耶の温もりを感じる。
「あなたに、私を」
沙耶は俺の頭を抱きしめて、俺の唇を再び合わせた。
暖かくて柔らかい沙耶の唇。
ゆっくりゆっくりと舌を沙耶に送って。
沙耶も、俺の舌に絡ませてきて。
愛しい。
もう言葉で言い表せない。
なら、俺のすることで、君への想いを。
沙耶の背中をゆっくり擦る。

腰の辺りから、手を抜いて。沙耶の胸へ。
ふこふことする柔らかい感触が、掌いっぱいに広がった。

「あ……」

ぴくっと、沙耶が震えた。

「ゴメン、いきなりだったか」
「ううん。大丈夫だよ」

沙耶の細い首筋に舌を這わせた。
甘く、柔らかい。
唇で甘噛みするようにはさみ、吸う。

右手を沙耶の背中に入れて抱き寄せるように力を入れた。左手を沙耶の胸に当てて、柔らかい感触を味わう。
女の子の体……。こんなにも細くて柔らかくて繊細なんだ。
大事にしたくて。愛しくて、恋しい。

沙耶の全てが……。欲しい。

そっと両手でブラウスのボタンを外して。沙耶の体がゆっくりと俺の目の前に映りこんでくる。
きめ細かい白い肌。はかなげな鎖骨。
そして、淡いピンク色の下着……。

「暗く、したほうが良いか？」
「ううん。灯りは消さないで……」
「いいのか？」
「暗いところは、嫌……。私を抱いてくれるのが、鏡だって、見て

いたいの」

沙耶の瞳は俺を見ているが、少しだけの不安が感じとれた。かすかに肩も震えている。

きっと、怖いのだろう。

でも、俺がしてくれるってことを信じているから、こうして俺に任せているんだ。

ブラウスを脱がして。タイトスカートのホックを外して、足から抜いた。

足は少し合わせ気味に重ね、手は隠そうとしたいけれど我慢をしているかのように、おなかと顔の横においていた。

淡いピンク色の上下の下着。まぶしいくらい綺麗な沙耶。

俺も、着ている服を脱いで、下着だけになり、沙耶に覆いかぶさった。

「怖いか？」

「ううん、大丈夫……」

沙耶のわきの下から背中を抱きしめ、俺の体と密着させた。

沙耶のぬくもりが直に感じる。

「俺は、怖い……。君に優しくしてあげられるか不安で」

「鏡……」

「でも、君のことが愛しくて恋しくてたまらなくて。乱暴になったりしたら、ゴメン……」

沙耶は両手を俺の首に回して抱き寄せた。

「いいよ。鏡になら、わたし、何をされても……。鏡のこと、好きだから」

「沙耶……」

唇を合わせて。舌を絡めた。

背中に回した手から、下着のホックを外す。

服の上から感じていた沙耶の大きな胸が露になっていく。

白いおわんのような綺麗な形。その先には恥ずかしそうにしている小さいピンク色の粒。

そっと壊してしまわないように下から優しくその突起まで掌を這わせた。

ぷるんと弾力があって、柔らかくて、暖かい。

右手で沙耶の左胸を擦り、優しく柔らかさを味わって。

右胸の突起を唇ではさみ、舌を這わせた。

「んっ……」

沙耶がぴくんと体を振るわせた。

「ゴメン、痛かったりしたか……？」

「ううん。大丈夫……。鏡が私の体を触ってくれてるって感触が、心地よかったの……」

気持ち、良かったんだ。

俺も、沙耶の胸の感触が心地よくて。何度も揉んで、下から上に這わせた。

柔らかくて暖かい。甘い香りが俺を包んでいく。
胸だけじゃなくて、彼女の全てを感じたくなった。
胸からおなかへ。おなかから、足へ。きめ細かい沙耶の肌が、俺の手をくすぐる。
なんて、綺麗なんだ。こんな女の子が、俺の腕の中に居てくれるなんて。それが、俺の愛している女の子だなんて。
頭の中のしんが痺れてくる。
気がついたら、沙耶の大事なところへ指を這わせていた。
「あっ……」
下着の上からでも、少し湿っている感じがする……。
そっと、下着の上から中に入れて、指で触れてみる。
少しだけのさわさわした感触を抜けると、くちゅと音がして、俺の指がするりと中に吸い込まれるのがわかった。
指がお湯にでもつけたみたいに熱く、とろとろとしていた。
「んっ……」
時折ぴくりとして甘い声を出す。
そのまま、ゆっくりとゆっくりと優しくなぞるように沙耶のそこを触った。
ここが、女の子の大事なところ、なんだな……。
「これも、取っていいか？」

少しだけ、こくんと恥ずかしそうに頷いた。
沙耶の足元に動いて、両手で沙耶の下着をとった。
沙耶は腰を上げて。ゆっくりと閉じた両足を抜けていく。
沙耶の生まれたままの姿が目の前に。
そっと足の間に入り、沙耶のそこを開いてみた。
淡い桃色のすじが少しだけ開いて、濡れて光っている。
すじの先には芍薬の蕾のような小さな突起が覗かせていた。
ここが、沙耶の。女の子の。
「鏡、恥ずかしい……よ」
隠そうとする沙耶の手をそっと取って、指を絡めた。
「とても綺麗だ。沙耶」
そっと沙耶のそこに顔を近づけて、舌を這わせた。
「あっ……、き、鏡」
俺の頭を両手で押さえている。
俺はそのまま、襞に合わせるように舌を上下に入れ、舐めてみた。
沙耶の香りがする……。
「はんっ……、鏡、そんな、汚い、よ……」

襞を唇ではさみ、舌を間に入れる。突起も吸い込むようにしてみたり、舌で舐めあげた。
柔らかく、熱い。
何度も何度も、舐めて、はさんで、吸い上げた。
「ああっ、んんっ。鏡、鏡……」
沙耶の声が甘く切ないものに変わってきている。
それがなんだか嬉しかった。
俺のものは緊張して、違う生き物のように固く大きくなっているのを感じる。
そっと沙耶の手をとって俺のものに触れさした。
びくっとして一瞬逃げようとしたが、ゆっくりゆっくりと俺のものを包んでいく。
「あ……。これが、鏡の……。すごく、硬くなってる」
「怖いか？」
「大丈夫……。なんか、かわいい感じがする」
強く握ったり、優しく握ったり。俺のものを確かめるように触っていた。
かわいい、か。まあ、気にしないでおこう。
「沙耶のここに、入って、いいか？」
「うん。鏡のだったら、怖くない……」
体を起こして、沙耶に覆いかぶさる。
沙耶にそっと口付けて、沙耶の間に入った。

ここ、だよな……。
俺のものは限界まで固くなっていて、大きくなっている。
沙耶のこんな小さなところに入るのだろうか。入っていいのだろうか。
沙耶の間は俺を待つかのように広がっていた。
そっと濡れた沙耶のそこに俺のものをあてがう。
ぴくっと、沙耶が震えた。
「怖いか？」
「ううん。大丈夫……。いいよ……」
ゆっくり、ゆっくりと入れていく。
ぬるんとした感触が俺に取り付いた。
「んんっ！」
眉間にしわを寄せて俺の肩を強く握る。
ゆっくりゆっくり、沙耶の中に埋まっていく。
ぬるぬるとしたぎゅうぎゅうに締め付ける沙耶。
体が本当に一つになるんだ。そう思った。
やがて、俺のものが全て沙耶の中に埋まり、見えなくなった。
俺は、今、沙耶の中にいる……。
「大丈夫か？」
「はぁ、はぁ、はぁ……。うん。大丈夫……」

眉間にしわを寄せて、何かに耐える表情。

「痛くないか？」

「ちょっと、痛かったけど、大丈夫」

そのまま、俺の背中に手を回し、腕から俺を抱きしめている。

「私の、中にいてくれるの、鏡なんだよね」

「ああ。俺の温もり、感じるだろ？　俺も、沙耶の温もり、感じてる」

「うん……。ねぇ、キスして……」

沙耶の瞳を見つめて。唇を合わせた。

「はぁっ……。はむっ」

沙耶が情熱的に、俺の唇を求めてる。

俺を引き寄せるように、もっと俺が欲しいと言うように、力強く抱きしめる。

俺も沙耶に負けないと、ぎゅっと抱きしめて、沙耶の唇を味わった。

愛してるって伝え合うように。

体も密着して。お互いの全てが一つになっているんだ。

それが、愛した女の子と。

沙耶も、同じなんだ。この嬉しさと、幸福感を感じているのは。

腰が無意識に、動く。

沙耶に俺を感じて欲しくて。沙耶を感じたくて。

沙耶の中を、味わう。

とても窮屈で、ぬるぬるして。熱くて。それでいて、ふんわりと包み込んでくれている。

無数の襞のトンネルが俺を包み、握っている。

「はあっ。んんっ。ああっ……」

沙耶も、声にならない声で、俺の動きを受け止めてる。

引くときには引いて、抜けそうになったら奥まで突いて。

沙耶の大きな柔らかい胸を包んで、何度も唇を合わせて、舌を絡ませて。

ぎゅうっと抱きしめて、抱き返されて。

腰から痺れるような快感が襲ってくる。

限界が、近い。

このめくるめくような幸福が、はじけて飛んでしまいそうだ。

「沙耶、沙耶……。もう、俺」

「あっ、んんっ、この、ままっ、私の中に」

「でも」

「私の、中まで、全部、鏡に、あげたいの」

「沙耶」

このまま、沙耶の中で……。

俺の……。

「鏡、鏡……わたし、もうっ」

「沙耶っ……」

左手で腰を抱きしめて。右手で沙耶の頭を抱いて。
沙耶の中、一番奥まで、一番沙耶と重ねあえる場所へ。
沙耶も、俺に掴るように、ぎゅっと抱きしめていた。
そこで、沙耶に。

腰が震える。
沙耶に、俺の全てを捧げるように、何度も何度も、沙耶の中で脈打つように、流れ込んでいく……。
沙耶も、俺のものをぎゅっと包んで、受け入れてくれている。

沙耶。沙耶……。

全身が快感に震えている。

好きな女の子に。愛している女の子に。

俺の全てをあげるから、ずっとそばに、いてくれ……。

「鏡……。ありがとう。私を受け入れてくれて。私……」
「沙耶……。俺もだ。愛している。これからもずっと、愛してる……」
「うん、私も……」

何度も、何度も。この時間が永遠に続くような、長い口付けを交わしていた。

エピローグ

「そっか……。そんなことがあったんだね。でも、私のことまでそんな細かく言わなくても良いじゃない。恥ずかしいな」

「あー、ゴメン。俺も恥ずかしかった」

「あはは」

「でも。今にして思う。佐山は、君と……沙耶と出逢えるようにしてくれていたんじゃないかって。佐山は全てを知っていて、そうしてくれたんだって」

「そうね……。そうだ。私もね、昔話をするね」

「昔話？」

「……昔、男の子と女の子がいました。その二人は互いに想いあっているんだけど、二人、この関係を壊したくなくて言い出せないでいる。憧れかもしれないし、本当に好きなのかも、まだ良くわからない。ただ、こうして二人でいることが楽しくて嬉しくて仕方がなかった」

「ああ」

「そんな、物語を読んだの。『鏡』という小説」

「その小説。俺も読んだことがある」

「私は、佐山さんに、逢ったことがあるわ」

「えっ？」

「そして、そのとき、この『鏡』という本を私にくれた。全てが嫌になったときに、未来を、あなたを与えてくれたの。そうして……。私も鏡と佐山さんのようになりたいって、いつも願ってた」

「佐山が……」

「この本を読んだ人をここに映し出すのが、この鏡という本だったんだよ。だから、私はあなたの世界の佐山さんになれた。この本を読んでから、鏡の中のような世界に入って……かわったの。私の幸せな未来に」

「そうか、それで佐山は」

「佐山さんは、今どうしていると思う？」

「知って、いるのか？」

「もちろん、知っているわ。彼女は、今きっと幸せだよ」

「それが、わかるのか？」

「わかるわ。だって、今の私も、本当に幸せだもの。こんなに、あなたに愛されて、大切にされて……。でも、まだ、もし、幸せでないのなら。いつかきっと、あなたと出会えるから」

「俺も、いるのか？　佐山のそばに」

「もちろん、いるわ。ほら、あなたも、佐山さんも、この本を読んでくれている」

「そうか。そうなんだ。やっとわかった。この、ここには居ないって感覚も、どうして感じていたのか」

「うん」

「そっちの世界にいる俺。もし、まだ、佐山に逢っていないのなら、探してくれ。逢っていたら、幸せにしてやってくれ。いや……。この本を読んでくれているのなら、わかるはずだな。そして、俺達は」

「うん」

「もっともっと幸せにならないと、いけないな」

「うんっ」

『鏡』 fin.

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0433f/

鏡

2010年10月10日14時25分発行